

農作物生産情報 (令和8年4月)

気象

(令和8年3月19日 仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報より)
向こう1か月の天気は数日の周期で変わり、平均気温は、高い確率が80%である。
降水量は、多い確率が40%である。
日照時間は、少ない確率が40%である。

水稲

初期生育確保のために、健全な苗を育てましょう！！

1 育苗

(1) 浸種

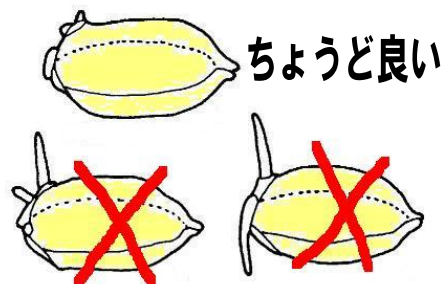
浸種は10日～14日間程度（日平均積算水温で100℃が目安）とし、浸種時の水温は10℃以下にならないようにする。低水温で浸種した場合、日平均積算水温で100℃を確保しても、出芽不良や出芽遅れの原因となる場合があるので注意する。

(2) 催芽

育苗器などを利用し、吸水させた粃を30～32℃で、16～20時間加温し、ハト胸程度（芽の長さ0.5～1mm）にする。

「はれわたり」は「まっしぐら」等よりもハト胸状態に達するまで時間を要するので、別々に確認する。

温度が40℃以上になると発芽率が低下するので、特に風呂を使う場合は注意する。



伸ばしすぎ！

(3) は種

中苗のは種量は、1箱当たり乾粃で100g（催芽粃で125g）とし、厚播きにならないよう注意する。

(4) 育苗土の準備

ふるいにかけて育苗土は、床土と覆土を合わせて1箱当たり5L程度準備する。施肥量は、中苗散播・基肥方式で窒素・リン酸・加里を成分量で1箱当たり各2.5gとする。

(5) 苗立枯病の予防

床土はpHが4.5～5.5の土を使用する。pHが高い場合はpH調整剤で調整する。育苗中は適温を保ち、過湿や過乾燥を避ける。

■ 薬剤による主な防除方法

適用病害	剤型	粉剤（土壌混和剤）	液剤（は種時かん注）
ピシウム菌		ナエファイン粉剤 6～8g/箱	タチガレエースM液剤 1000倍液を1L/箱
フザリウム菌	タチガレエースM粉剤 8g/箱		ナエファインフロアブル 2000倍液を1L/箱
リゾープス菌 (くものすかビ)		ダコニール粉剤 15～20g/箱	ダコニール1000 1000倍液を1L/箱

(6) 置床の準備

ア ハウス育苗方式

置床は育苗箱の底と密着するよう均平にする。砕土が不十分な場合や足跡等のくぼみがあると生育ムラができるので十分注意する。

イ トンネル折衷育苗方式

置床の硬さは耳たぶ程度に調整し、必ず排水溝を設ける。やわらかく、育苗箱が床土に沈み込むようだと、過湿による出芽障害となるので注意する。

(7) 温度管理

生育に合わせた温度管理を行うため、必ず温度計を苗の高さに設置する。

ア 出芽期まで

日中 35℃以下、夜間 10℃以上。

ハウスではシルバーポリトウなどの被覆で、水分保持と保温をする。天気の良い日には、出芽前でも換気を行い、35℃以上にならないように注意する（シルバーポリトウは風でめくれないよう、箱下に折り込むか、重しを置く）。

イ 出芽揃期～1.5葉

日中 30℃以下、夜間 5℃以上。

ハウスの大部分の箱で7～8割程度の出芽が見えたら、早めに被覆資材を除く。持ち上がった覆土はかん水等で落ち着かせ、種籾が露出していたら土をかける。

ウ 1.5～3葉

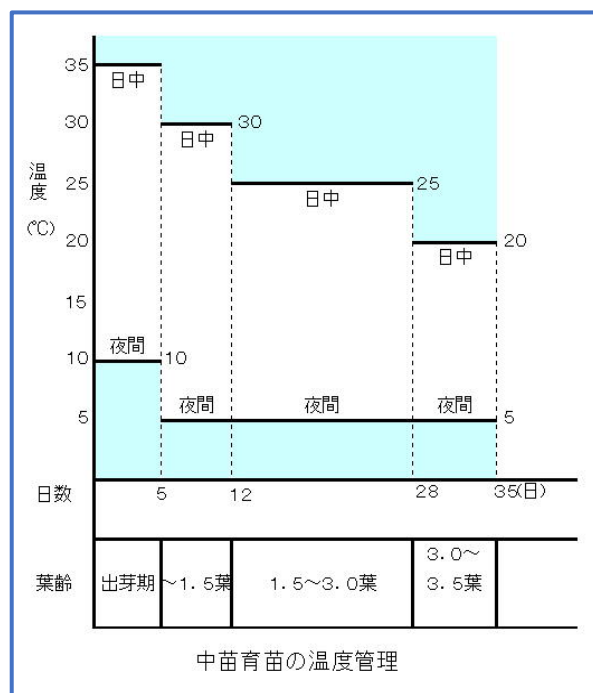
日中 25℃以下、夜間 5℃以上。

エ 3葉以降

日中 20℃以下。天気の良い日は外気に慣らし、苗を丈夫に育てる。

※霜・低温が予想される場合

被覆資材での二重被覆を行うか、ハウス内に暖房器具を入れて保温する。



(8) 水管理

かん水は、床土が乾いたら午前中（地温が上がる前）にたっぷり行う。

機械的に毎日かん水すると、箱内の根張りを弱くし、軟弱徒長苗になりやすいので注意する。

(9) 追肥

葉色が淡くなったら、かん水を兼ねて追肥する。1箱あたり500mLの水に硫安を現物で5g溶かして行う。追肥後は必ず水洗いする。

「新ロング入り苗箱専用肥料」を使用した場合には、追肥は行わない。

2 本田作業

(1) 施肥（基肥）

品質と食味向上のため、窒素の総量は、「まっしぐら」・「はれわたり」の場合7～10kg/10aとする。基肥量は1回追肥体系の場合では総量の7～8割、2回追肥体系の場合では総量の6割とする。いずれの品種も側条施肥の場合は、基肥を2割減ずる。

「青天の霹靂」の基肥窒素成分は6kg/10a以内とし、全層穂肥1回追肥体系を原則とする。

多肥栽培では、倒伏したり、いもち病にかかりやすくなるほか、食味・品質の低下につながるため、前年のいもち病の発生程度や倒伏状況に応じて基肥量を加減する。

大豆の復元田では、生育が過剰となり、倒伏のおそれがあるので基肥8割減～無肥料とし、追肥は生育量や葉色を見て判断する。小麦の復元田では、基肥4～6割減とし、生育に応じて追肥を行う。

復元田では、倒伏軽減と初期生育確保、登熟向上のため、ケイカルとようりんを施用すると効果的である。

(2) 耕起・代かき

耕起作業は耕起深15cm程度を目標にしていねいに行う。

稲わらを鋤き込んだ水田では、浮きわらを抑えるため水深を浅めにして代かき作業をする。

小麦

排水対策や適期追肥に努めよう！

1 湿害防止

転換畑等では、融雪水、降雨水が長時間停滞しないよう、明きよや排水溝の補修、補強を行い、ほ場外に速やかに排水できるようにする。

2 追肥

消雪後、幼穂形成期までのなるべく早い時期に追肥を行う。

追肥量は窒素成分で2kg/10aを基準とし、ほ場の地力等を考慮して増減する。

3 病害虫防除

越冬前の生育量が多く、繁茂しているほ場では、うどんこ病の被害が大きくなるので、適期防除に努める。

りんご

春作業の準備を急ごう！

今年は積雪が多く、主幹の裂開や下枝の欠損などの樹体損傷が確認されているので、被害樹には適切な処置を行う。りんごの発芽は10日程度早いと見込まれるが、発芽後は耐寒性が急激に低下し、開花期が最も寒さに弱いため、結実確保に向け、低温や降霜への対策を行う。

また、自園地の生育状況を確認し、SSの試運転などを行うなど防除体制を整える。

1 雪害を受けた樹の処置

3分の2以上裂開している枝は、ゆ合の見込みがないので剪去する。被害部は腐らん病や銀葉病の侵入門戸となるので、傷口にバッチレート又はフランカuttosプレーで処置する。

ア わい性台樹

側枝のゆ合が可能な場合は、早い時期にビニールなどできつく縛って傷口を密着させ、ひもなどで吊り上げる。

側枝が不足となった樹は、目傷等により側枝の発生を促したり、主幹部に接木をして側枝の補充を図る。

イ 普通台樹

回復可能な枝は傷口を密着させて、かすがいやボルト等で補強し、支柱で支える。

樹形を損ねる被害を受けた樹では、徒長枝を利用したり、高接ぎ（長穂接ぎ）などで樹形の立て直しを図る。

2 野ネズミ被害樹の治療

樹幹を食害された場合、樹皮が幹周の4分の1以上残っているものは早めにバッチレートを塗るか、テープなどを巻いてカルス形成を促す。

3 霜害防止対策

安定生産のため、霜害防止対策には万全を期す。一般に、降霜は午後7時頃の気温が6℃位で1時間に1℃以上の気温の低下があり、晴天無風状態であれば危険性が高い。霜害が予想される場合には、气象台から霜注意報が発令されるので、これらの情報に注意する。

■ 燃焼法による防止

種類	利用方法
A重油オイル缶	4リットル缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。
霜カット	おがくず：灯油＝2：1（容量）の割合で混ぜたものを2kgずつ袋に詰め、10a当たり40～60個を配置する。

注) 1 灯油の保管量が200～1000ℓ：少量危険物貯蔵届出書の提出が必要

2 〃 1000ℓ以上：危険物取扱者の資格が必要

3 所轄の消防署に「火災と紛らわしい煙又は火災を發する恐れがある行為の届出書」などを提出する。

4 粗皮削り

粗皮削りは、胴腐らんの早期発見やハダニ類、ハマキムシ類など病害虫防除のため、必ず実施する。

5 基肥

基肥は雪どけ後、速やかに行い、遅くとも4月20日頃までに施用する。石灰質肥料は基肥を施用後、降雨があった場合は2～3日後に、降雨がない場合には2週間後を目安に施用する。

肥料の施用量は下表のとおりであるが、追肥を計画している園地では、窒素分の6割を基肥とする。

果実の着色が良くない園地や樹勢が強すぎる園地では、施肥量（特に窒素成分）を減らして樹勢が適正になるか観察し、追肥で調整する。

■ りんごの標準施肥量（年間総量、園地全面施用）

区 分		施肥量(kg/10a)			備 考
普通台樹	わい性台樹	窒素	りん酸	カリ	
成 木	6年生～	15	5	5	部分（樹冠下）施肥の場合は、施肥量を減ずる
6～10年生	4～5年生	10	3	3	
1～5年生	1～3年生	5	2	2	

6 病害虫防除

今年は生育の進みが早いと見込まれることから、散布適期を逃さないよう注意する。この時期の散布間隔は10日以内を厳守し、適正な散布量で丁寧に散布する。

散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

■ 薬剤散布（散布時期は生育状況により変わるので、新しい情報を参考にする）

散布時期	基 準 薬 剤	散布量 リットル/10a
ふじの展葉1週間後頃 (4月下旬頃)	マシン油乳剤 200倍 トップジンM水和剤 1,000倍 又はベンレート水和剤 2,000倍 + チウラム剤 500倍	300
ふじの開花直前 (5月上旬頃)	SDHI剤	320
ふじの落花直後 (5月中旬頃)	ミギワ20フロアブル 4,000倍 + デランフロアブル 1,500倍 又はチウラム剤 500倍 又はマンゼブ剤 600倍	350

※SDHI剤は、以下の4剤から選択する。

フルーツセイバー	2,000倍	ロンセラーフロアブル	3,000倍
カナメフロアブル	4,000倍	パレード15フロアブル	2,000倍

※チウラム剤：チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル

※マンゼブ剤：ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤

7 腐らん病対策

近年、発生が多く、雪害による樹体損傷部からの感染拡大も心配される。早めに被害部の切除や治療を行って、感染拡大を防ぐ。

枝腐らんは見つけ次第、切り取って適切に処分する。

胴腐らんは再発病斑を含め見つけ次第、次のいずれかの処置を行う。

ア 泥巻きを行う場合は、周辺健全部を含めて病患部に厚く泥を張り付ける。

イ バッチレートまたはフランカットスプレーを使う場合は、周辺健全部を含めて病患部を紡錘形に削ってから塗る。

ウ トップジンMオイルペーストを使う場合は、病患部を削り取り、さらに浸透性を高めるために周辺の健全表皮（上下約5cm、左右2～3cm）を薄く削ってから塗る。なお、再発してしまった場合には、アカイの方法に切り替える。

エ 胴腐らんの発病が著しい樹は、病原菌の伝染源になるので積極的に伐採し、適切に処分する。

8 マメコバチの放飼と管理

放飼時期を調節するため、筒内の蜂が動き始め、カチカチと音がするようになった頃に、0～5℃の冷蔵庫に保管する。

展葉1週間後頃の薬剤散布2～3日後に冷蔵庫から出し、放飼する。また、土取り場や防鳥網の設置などの管理も怠らないようにする。

9 人工受粉による結実確保

結実確保のため、マメコバチによる受粉だけでなく、積極的に人工受粉を行う。

10 機械の点検整備と事故防止

4月は、農作業が本格化する時期である。今年は雪どけ水の影響で土壌が緩んでいると想定され、機械作業による重大な事故が発生しやすい条件であることから、走行路や枝の出具合などを確認し、転落・横転・衝突しないよう園内を整備する。

また、スピードスプレーヤや草刈り機、高所作業台車等の使用前には必ず点検し、基本操作を守って使用し、事故防止に努める。

特産果樹

◆ おうとう ◆

摘芽で大玉生産、霜害防止対策を徹底しよう！！

1 野ネズミ被害樹の治療

樹幹を食害された場合、樹皮が幹周の4分の1以上残っているものは早めにバッチレートを塗るか、テープなどを巻いてカルス形成を促す。

2 霜害防止対策

りんごと同様、霜害対策には万全を期す。（詳細はりんごの項3を参照）

3 摘芽

紅秀峰は着果量が多くなりやすいので、催芽前（4月上旬頃）までに摘芽を行う。花束状短果枝の大きい花芽を3芽程度残して、他の花芽を指でかき取る。葉芽（赤い丸印で囲んだ芽）は残し、人工授粉は必ず行う。

なお、晩霜の常襲地帯や花芽の少ない樹、樹勢の強い樹では行わない。



摘芽前（花芽数：6個）



摘芽後(同: 3個、大きい花芽を残す)

4 結実確保

おうとうの開花期は、低温や強風に遭遇することが多い時期であることから、マメコバチを導入している園地であっても、毛ばたきによる人工受粉を徹底する。

毛ばたきは5分咲き頃と満開期に、少なくとも2回実施する。

5 病虫害防除

「開花直前」以降は、散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

■ 薬剤散布（散布時期は生育状況により変わるので、自園地の状況を確認する）

散布時期	基準薬剤	散布量 リットル/10a
発芽前	マシン油乳剤 (95) 50倍	350
開花前	フェニックスフロアブル 500倍	200
開花直前 (4月下旬)	オーソサイド水和剤80 800倍 又はチウラム剤 500倍	450
満開5日後頃 (5月上旬)	パスワード顆粒水和剤 1,500倍 又はオンリーワンフロアブル 2,000倍 又はラリー水和剤 2,000倍 又はオーシャイン水和剤 3,000倍	500

- ※マシン油乳剤（97）：トモノールS、ハーベストオイル
- ※チウラム剤：チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル
- ※コスカシバ対策として、開花前までにフェニックスフロアブル 500 倍を枝幹部に十分かかるように手散布する。

◆ ぶどう ◆

晩腐病や黒とう病の防除のため、休眠期の防除を必ず行おう！！

1 ぶどう棚の修復や雪害の対策

ぶどう棚は速やかに修復し、主枝を結束する。

傷口はバッチレート塗布したり、早い時期にビニールなどできつく縛って傷口を密着させること癒合を促す。

2 霜害防止対策

りんごと同様、霜害対策には万全を期す。（詳細はりんごの項3を参照）

3 病虫害防除

休眠期の防除は、樹全体に薬液が届くように丁寧に散布する。特に晩腐病や黒とう病の重要な防除時期であるため、必ず実施する。

■ 薬剤散布（散布時期は生育状況により変わるので、自園地の状況を確認する）

散布時期	基 準 薬 剤	散布量 リットル/10a
休 眠 期	デランフロアブル	200倍
	又はパスポート顆粒水和剤	250倍
	又はベンレート水和剤	200倍
	ガットキラー乳剤	100倍
※展葉直前	モスピラン顆粒水溶剤	2,000倍
		200

※ツマグロアオカスミカメの発生が多い園地では展葉直前にモスピラン顆粒水溶剤を特別散布する。

野菜

温度変化が激しい時期、きめ細かな温度管理に努めよう！

◆ トマト ◆

1 定植準備

ハウスのパイプ等の歪みや、被覆ビニールの破損がないか確認し、早めに修復する。
土壌が乾燥している場合、耕起前に散水し、手で軽く握って崩れない程度の状態で耕起する。

堆肥や土壌改良資材等は定植1か月前、基肥は定植2週間前を目安に施用する。

■ 標準施肥量 (kg/10a)

窒素	りん酸	カリ	備考
10~12	28~35	10~12	冬期間、屋根のフィルムを除覆しない場合、肥料が残るため、基肥量は土壌分析に基づいて減ずる。

定植の7~10日前にはマルチを張り地温を高めておく。

2 定植

定植前日に鉢にかん水する。肥料不足の場合は液肥で追肥を行う。

深さ10cmの地温15℃以上を確保し、定植を行う。植え付けは、花房を通路側に向け、鉢の回りを両手で上から押して土と根鉢を密着させ、根鉢上面と畝面が同じ高さになるように行う。植穴を掘ったときに出た土は植穴の周囲に盛り土として置き、マルチの熱が逃げないようにする。

夜間の冷え込みが予想される場合は、不織布のべたがけや加温機を設置する等、保温に努める。

◆ メロン ◆

1 育苗管理

(1) 移植（鉢上げ）

移植1週間前までに鉢に土を詰め、ビニールで被覆し床温（地温）を高めておく。

苗立枯病防止のため深植えせず、温度が下がり始める午後3時頃までに移植を終える。

(2) 移植後の管理

床温（地温）は下図を参考に管理し、トンネル内の気温は15℃~30℃を目標にする。

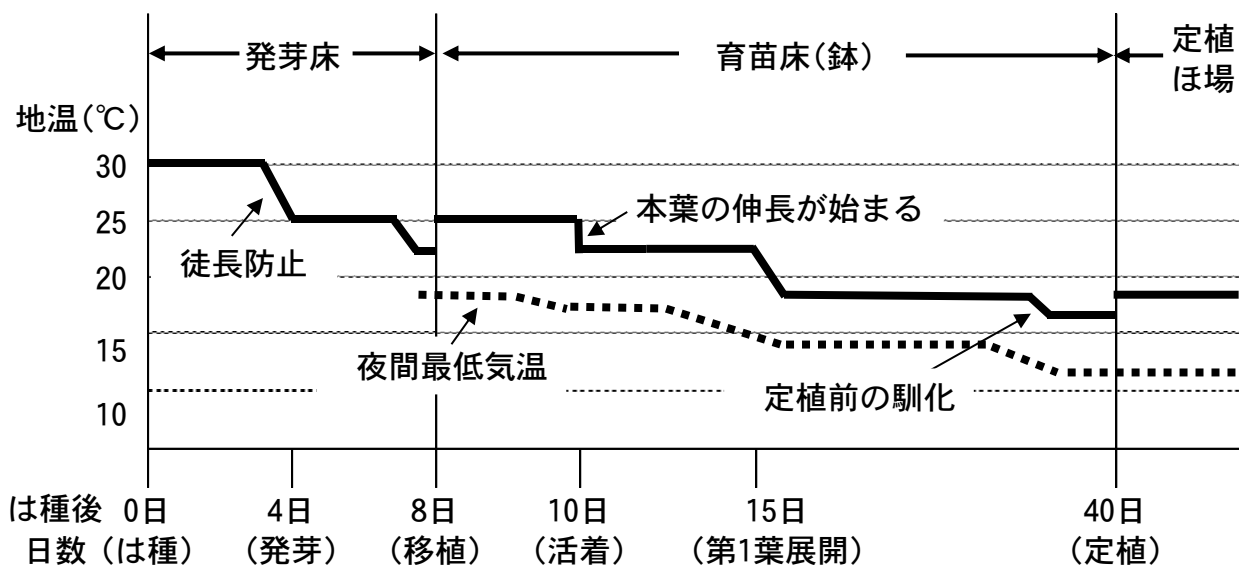
鉢上げ直後から1~2日間はトンネルを密閉し、日差しが強い時は遮光し、最高気温は30℃以上にしない。3日目からはトンネルを開閉して換気を行い徒長を防ぐ。

鉢の表面が乾いたら、床温（地温）を下げないように午前中に温水をかける。

葉と葉が重なり合うようになったら、鉢ずらしを行い、苗の受光体勢をよくする。この時、外側と内側の苗を入れ換え、生育を揃える。

定植の7日位前から夜温を徐々に下げ、苗を外気に慣らす。

■ 発芽床と育苗床(鉢)の床温(地温)管理



2 本畑の準備

堆肥や土壌改良資材等は定植2週間前に、基肥は定植10日前に施用する。

畝の高さは、畑地では20cm、転作田では30cmの高畝とする。

定植の1週間前にはマルチ、トンネルを張る。マルチは、地温上昇効果や抑草効果の高いグリーンマルチを使用し、深さ20cmの地温を18°C以上に高めておく。また、均一な土壌水分を確保するため、マルチ前に十分かん水するか、降雨後にマルチングする。

3 定植

速やかな活着を促すため、定植作業はなるべく温暖な日に行う。

夜間の冷え込みが予想される場合は、早めにトンネル被覆資材を閉じるとともに、保温キャップや不織布などの資材を併用し、保温に努める。

花き

温度・水管理を徹底して初期生育を確保しよう！

◆キク◆

1 7月・8月出荷の管理

(1) 育苗

育苗期間は15~20日を基本とし、定植日に合わせて計画的に挿し芽を行う。早期発らいする品種もあるので、電照等により花芽分化を抑制する。

挿し芽は病害虫に侵されていない健全なものを選定する。

(2) 施肥

全量で窒素成分 10～20kg/10a を基準とし、基肥として 6～7割を施用する。追肥は、葉色や生育の状況に応じて適宜行う。

(3) 定植

定植は、無加温ハウス栽培では 4 月が適期となる。早すぎると奇形花等が発生しやすく、遅すぎると草丈が短くなるので、仕立方法を考慮して定植時期を決定する。

定植後は活着を促すため、むらなく十分にかん水し、10℃を目標に夜温を確保する。活着後は、昼温 25℃、夜温 5℃程度を目安とし、必要に応じて保温や換気を行う。

◆トルコギキョウ◆

1 夏出荷の管理

(1) 秋播き無加温栽培

日照時間の増加、気温の上昇に伴い茎が伸長するので、発らいまで極端に乾燥させないよう管理する。低節位から分枝が発生した場合は早めに除去して主茎の伸長を促す。

(2) 春播き栽培(4月定植)

ほ場の pH が低い場合、pH 6.5 を目標に土壤改良する。基肥は基本的に 3 要素とも 10kg/10 a 程度であるが、EC が 0.4 以上の場合には下表を参考に減肥する。

■ 施肥前 EC 値による基肥窒素量減肥の目安 (対基準量)

土壌の種類	0.3ms/cm以下	0.4～0.7	0.8～1.2	1.3～1.5	1.5以上
腐植質黒ボク土	基準量	2 / 3	1 / 2	1 / 3	無施用
沖積土・洪積土			1 / 3		
砂質土		1 / 2	1 / 4		

定植前に地温を 12～20℃に高めておき、定植適期の本葉 2.0～2.5 対 (展開葉 4 枚程度) の時に定植する。

かん水は地温が急激に下がらないよう暖かい日の午前に行い、極端に乾燥しないようこまめに行う。

2 春播き秋出荷のは種・育苗

育苗用土は pH 6.5 前後で肥料成分が含まれている清潔なものを使う。用土に有機質が多く含まれているとチビクロバネキノコバエが発生しやすいので注意する。

小さいセルで育苗すると老化しやすいため、288 穴程度の大きさのセルトレイに 1 穴 1 粒播きする。は種後は覆土はせずに、発芽まで昼温 20～25℃、夜温 15～18℃を目標に管理する。

発芽までは乾燥させないことが重要で、上部からのミストかん水が望ましいが、そのような設備と労力がない場合は底面吸水も有効である。その場合は、育苗箱の底から根が見え始めたら、上部からのかん水に切り替える。

発芽揃い後は、昼間 20℃、夜間 15℃程度を目安に管理する。

山火事防止運動強調期間実施中 4月1日～6月10日

春は空気が乾燥し、火災が発生しやすい時期です。剪定した枝等をやむを得ず園地で焼却する場合、山火事など火災の発生防止を徹底してください。

農作業事故に気をつけましょう！

- 必ず、作業の合間に十分な休憩を取りましょう。
- 自分の体力、注意力を過信しすぎず、無理のない作業を行いましょう。
- 家族や周りの人など、地域全体で注意を呼びかけましょう。

農薬適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう！

- 使い残した農薬などは、河川等へ絶対捨てない。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認しましょう。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

登録品種に関する注意喚起

- 登録品種の種苗・収穫物等を利用するには、原則として権利者の許可が必要です。
 - ・育成権者の許可を得ずに、自家採取した登録品種の種苗を近所の農家等に配布することは種苗法に違反します。
 - ・他都道府県で開発された品種によっては、作付けできる都道府県が限定されている場合があります。
- 登録品種かどうかの確認は品種登録ホームページで行い、正規のルートで種苗を入手しましょう。
- 育成権者を侵害すると民事請求を受けたり、刑事罰を科される場合があります。

農林水産省品種登録ホームページ

<https://www.maff.go.jp/j/shokusan/hinshu/>

